静岡県知事
かわかつへいた
川勝平太

マレーシア元首相
Mahathir bin Mohamad
マハティール・ビン・モハマド

# 日本人から学んだマレーシアに今、日本人が学ぶべきこと

**今こそ、大切なのは自国の誇りと文化。日本の発展に学んだルックイースト政策でマレーシアを近代国家へ導いたマハティール元首相と川勝平太 静岡県知事が日本とアジア諸国の可能性について語り合った。**

## 富士山のシルエットに日本人の勤勉さが重なる

**知事** 「マハティールの履歴書―ルック・イースト政策から30年」（日本経済新聞出版社）の邦訳のご出版、おめでとうございます。読みやすく、内容はまことに興味深いものでした。今回の著書は、閣下のお人柄とマレーシアという国の成り立ちを知る上でとても有益です。ところで閣下は、静岡県にお越しになったことはおありですか。静岡にはスズキ、カワイ、ヤマハ、浜松ホトニクスなどの世界的な企業があります。ホンダの創設者の本田宗一郎は静岡県出身で、トヨタの創設者の豊田佐吉も静岡県生まれです。

**元首相** 伊豆の温泉に何度か行ったことがあります。日本には70回以上も来ていて、北海道から沖縄まで、行ったことのない都道府県はないほどです。日本ではいつも新しいことに出会えます。これは、常に進化している証拠です。

**知事** ぜひ、今度はゆっくり静岡県に滞在していただきたいと思います。静岡県には富士山があります。富士山が世界文化遺産に登録されたのをご存知ですか。

**元首相** もちろん知っています。本当におめでとうございます。これまで、新幹線や車の中から富士山を幾度となく見ています。最初の出会いは1961年、東京から大阪に向かう飛行機の中から見て、美しい富士山の姿に息を飲みました。その流れるような美しい姿と日本人の勤勉な姿が重なります。

## 国民に自信と勇気を与えたルック・イースト政策

**知事** まずは、閣下のお名前とリーダーシップを世界的に一躍有名にした「ルック・イースト政策」についてお話しいただければと思います。

**元首相** 私の日本への関心は、第二次世界大戦にさかのぼります。アジアの中で、欧米諸国と対等に発展を遂げているという事実が同じアジア人としてうれしかったのです。1961年に来日したとき、日本は東京オリンピックを控え、戦後からの復興の真っただ中で、日本人の姿に感銘を受けました。街角で働く人々は、一杯のご飯とみそ汁だけで、瓦礫の撤去や道路の整備に汗を流していました。日本人は、とても働き者で、統率もとれていると感じました。そして、復興のスピード感にも驚かされました。日本国民の質の高さが復興を加速させたことは間違いありません。国がいくら天然資源に恵まれていたとしても、国民の質が高くなければ国は発展しません。日本は正にその代表と言っていい国であり、私は日本の急速な発展に強い興味を持ちました。そこで1981年に首相に就任した時、発展途上国が先進国入りするモデルとして、まず日本から学ぼうと「ルック・イースト政策」を導入しました。最初に日本の労働慣行から学ぼうと考えました。仕事への取り組み方や責任感、仕事を貫徹するプライド、達成できなかった時の羞恥心、このような日本人の特徴が成功につながっていると思っています。私はこの価値観をマレーシアにも取り入れ、人々に根付かせようと21年間努力をしました。そして、ある程度は目標を達成できたと確信しています。

**知事** 閣下が最初に来日した1961年の頃は、日本は戦後復興から高度成長に入る時期でした。戦後日本の目覚ましい経済発展は世界史的に見ても奇跡的です。その後、日本は国際社会から高く評価されるようになりましたが、バブル崩壊後の1990年代か

ら21世紀にかけて、日本の世界に占める地位は下降気味です。日本は転換期にあります。閣下はマレーシアの「偉大なる父」であり、自他ともに認めるアジアが生んだ優れた指導者の一人です。そのようなお立場から、「日本は何をすべきか」について、ご助言をいただけませんか。

**元首相** 日本はアジアの中で植民地化されなかった数少ない国です。私たちマレー人は、ポルトガルに征服されヨーロッパ人に対して劣等意識を持っていました。しかし、日本はヨーロッパに征服されることなく、むしろ、ヨーロッパが押しつけた劣等意識に抵抗できることさえ、私たちに教えてくれました。現在、私たちは、政治制度、政策、軍事力など欧米の制度を数多く取り入れています。しかし、植民地から解放されても永年にわたって、マレーの人々は欧米に劣等意識を持ち続けてきました。その思考方法を完全に変えなければならなかったのです。私は日本人の持っている価値観、信頼感、強い愛国心をコピーしたかった。ヨーロッパ人に何をするのか指示されることなく、自分たちに価値があることを自らが知ることが重要です。つまり、ルック・イースト政策の真の意味は、国民に自信と勇気を与えることだったのです。そして私はスローガンを立てました。「マレーシア・キャン」。マレーシア人にはできるという意味です。その結果、自信が生まれ、多くの欧米の技術力を身に付けることもできました。

**知事** 確かに、十九世紀中頃、西洋列強と対峙した際、日本には愛国心が満ちていました。日本人は西洋諸国の植民地になることを嫌い、西洋列強への対抗意識を燃やしました。一人二人の特定の人物がそうだったのではなく、日本全体に同じような心情が満ちていました。その愛国心が基礎となり、それが日本人に西洋に挑む勇気を与えたのだと思います。日本は政治的独立を堅持し、西洋へのキャッチアップに成功し、自信をつけました。要するに愛国心と勇気、そしてプライドは大切な価値なのですね。

## ASEANの共存共栄モデルは世界に誇るべきお手本

**知事** 今、私たち日本が良い関係を築いているマレーシア・フィリピンのミンダナオ・インドネシア・ブルネイなどのASEAN（東南アジア諸国連合）諸国はイスラム教国です。9・11以降、イスラム教徒のイメージはテロリストや原理主義として世界に広がっていますが、そうした国々や地域との交流を通して、日本人はもっとイスラム教徒の考え方、イスラム世界の実態、イスラム世界との関わり方について学ばねばなりません。

**元首相** イギリスがインドを植民地化したとき、分断し統治するというやり方を常套手段としました。かつて、イスラム教徒はインドを征服したことがありましたが、ヒンズー教徒と上手に付き合いました。イスラム教徒の王はヒンズー教徒の娘と結婚しましたが、改宗を迫らなかった。比較的平和的なやり方をとったのです。

オスマン帝国時代も、人民に改宗を求めませんでした。ボスニアはヨーロッパ人で、イスラム教徒ですし、他の地域には様々な宗教が存在しました。つまり、そこに住む人々の宗教を尊重しました。

コーランの冒頭には、あなたは自分の様式で祈り、私たちは私たちの様式で祈るというくだりがあります。あなたにとっての宗教があり、私には私の宗教がある。そして、そこには対立は生まれないのです。

**知事** 興味深いことに東南アジアのASEANでは、異なる宗教をもつ10カ国が共存しています。異なる宗教の人々が争わず、相手を尊重し、経済的な共同作業を行い、災害の時には協力し、互いに内政に干渉せず、共存共栄の道を進んでいます。1967年に結成されて以来、徐々に加盟国が増え、ずっとうまくやってこられた。シンガポールやマレーシアのように経済的に高い位置にいる国も、ラオスやカンボジアのようにまだまだ所得が少ない国でも、共存していく道があることを世界に示しています。これはEU（欧州連合）やNAFTA（北米自由貿易協定）よりも優れたモデルであると思います。

**元首相** ヨーロッパはキリスト教の地と呼ばれています。ヨーロッパの国々は長い年月を経て、全てキリスト教国となりました。彼らの考え方は、「支配すること」を一義的な目的にしてきたように思います。アメリカの政策も同じで、キリスト教精神に基づいています。しかし、アジアではそれぞれの国に宗教が存在します。仏教、キリスト教、イスラム教、儒教など、全ての宗教が共存しています。決して改宗を求めることはありません。とりわけ東南アジア諸国では、何百年も多宗教が存在し、その国々の間で交易をしてきました。マレーシアは、人口の60％がイスラム教徒であるマレー人、30％が中国人、10％がヒンズー教徒であるインド人で構成されています。まさに多民族国家ですから、相手を尊重して共存しています。このようなASEAN諸国のやり方は、国家間の協力体制のいいお手本ではないでしょうか。それぞれの宗教を堅持して、経済協力をしていくという哲学の方がうまくいくと、私は確信しています。

**知事** 私はASEANに典型的に見られる、そのような共存の哲学こそが、日本を含め多くの諸国が学ぶべきお手本だと思います。さかのぼれば、すでに15世紀ー16世紀の東南アジアが世界貿易の原型を実現していました。あらゆる民族・宗教の人々が集まり、貴重な物産、たとえば木綿、絹織物、宝石、陶磁器、胡椒・香辛料など、ありとあらゆる物が交易されていました。まさに世界貿易と言って良いものです。ただ、それは自然発生的なものでシステム化されてはいませんでした。それを自覚的に共存システムとして育てているのが現在のASEANです。閣下のおっしゃった、異なる宗教を持つ人々同士、異なる人種、民族同士で共存するべきだという哲学によってASEANは半世紀にわたって成長してきました。これこそが人類社会が共存していくために学ぶべき事例でしょう。

**元首相** ASEANは他国との関係を構築するモデルになると思います。東南アジアの国々同士の征服も、植民地的支配も過去にはありませんでした。マレーシアがタイの統治下に入ったときも、金銀をタイの王に送りましたが、行政権は私たちが維持していました。しかし、ヨーロッパは支配しなければ済まなかった。文化の違いと言えます。

**知事** 閣下はヨーロッパ中心主義を批判しています。そのヨーロッパも19世紀や20世紀前半までは強力でしたが、今日では相対的な地位は下がっています。日本人も、その意識の中にある、歴史的にも宗教的にもヨーロッパに学ぶルック・ウェスト中心主義を克服しなければなりません。現代の若い世代への希望はございますか。

**元首相** 若い人々は欧米のテレビやインターネットなどの文化に影響を受けています。これらは人々の文化を変えてしまいました。自国の文化のプライドを捨ててしまったと言っても過言ではありません。今こそ、日本の文化を復活させるべきです。日本人は決して、攻撃的ではありませんが、適度な競争があり、一生懸命に何かに打ち込むことをとても大切にしています。日本人としてのプライドを持ち、また、失敗をした時には羞恥心を感じる。そういった日本人の美徳をいつまでも大切にしてほしいと思います。

**知事** 人に恥じるようなことをしないという日本人の気質は、閣下がご自身の目で見出されたのですね。恥を知るというのは、閣下の御気質とも通じるところがあるようです。私自身も廉恥心を大事にしており、今、日本の国土のシンボル富士山のある静岡県を預かる知事として、霊峰に恥じない人づくり、地域づくり、国づくりを目指しています。本当にありがとうございました。

※この対談は、学芸総合誌・季刊『環―歴史・環境・文明』（藤原書店）の企画で実施された。

Profile

マレーシア元首相

**マハティール・ビン・モハマド**

1925年生まれ。1964年、下院議員に初当選。教育相、副首相などを経て1981年、第4代首相に就任。日本を手本とした「ルック・イースト政策」（東方政策）を実施。22年の長きにわたって政権を担当し、卓越した指導力によってマレーシアの高度経済成長を実現。2003年、首相を退任。現在はペルダナ・リーダーシップ財団の名誉プレジデントなどを務める。